

20年を振り返って 一門倉先生と共に

小川 誉子美

留学生センターは、1992年に発足し、今年で20周年を迎え、2013年4月より新たな組織として再出発するが、この節目に20年を振り返ってみたい。

1992年、生活部門1名、日本語部門5名で出発した留学生センターは、10月より国費留学生対象の日本語予備教育を開始し、1997年、短期留学部門の開設にともない、短期留学生の受け入れを、2000年から、日韓共同理工系学部留学生コース（通称日韓プログラム）の受け入れを開始した。この間、教員研修生を含む、センターでの受け入れプログラムの留学生総数は以下のとおりである。

日本語予備教育生受入（平成5年度以降）	229人
教員研修生受入（平成10年度以降）	100人
日韓プログラム生受入（平成12年度以降）	67人
短期留学生受入（平成14年度以降）	644人

「国際学術交流、国際教育関係等の状況」63頁より

この間、400名から900名へと留学生数は増え、キャンパスの内外での日本人学生、地域の方々、ボランティアの方々との交流の場も整ってきた。こうした日々変化する状況の中で、一般の関心は新しい企画やプログラムに向けられることが多いが、実際、その根底にある理念をより豊かなものとし、その姿勢を示していかなければ、新しいものへの対応だけでは、真の成果も、次につながる信頼も得ることはできない。

この20年、センターには大きく変化した側面、そして、外的変化に左右されずに保持し続けた側面があると思う。後者の部分に関していえば、やはり、門倉先生の留学生教育に対する「留学生中心」という変わらぬ理念、事態に向き合う真摯な姿勢であったと、1993年秋のご着任から19年半の年月をご一緒させていただいてしみじみ感じる次第である。